

4 子どもとかわる

少子高齢化が進行している現代では、みなさんが日常生活の中で小さな子どもとかわる機会は減少しています。

乳幼児と出会い、ふれあう経験は、他者への関心や共感能力を高め、愛着の感情を醸成するとともに、乳幼児を身近な存在として感じることで、命の大切さについて考え、将来、親となり子育てをすることへの理解を深める重要な機会となります。また、将来、子どもを持つか持たないかにかかわらず、さまざまな人間が生活を営む地域社会の一員として、子どもや子どもを持つ家庭を理解する視点を育てる大切な機会となります。

みなさんは、小さな子どもにどのようなイメージを持っていますか。乳幼児とふれあう体験を通じて、「子ども」という存在を理解し、これまで育てられてきた自分から、これからの育てる自分について想像してみましょう。

■乳幼児とのふれあい体験学習

道内には、高校生が乳幼児とふれあう機会を通じて、命の大切さを感じ、将来、親となり子どもを育てることへの理解を深める学習に取り組んでいる高校があります。

実際に乳幼児とふれあうことで子どもへの関心が高まり、子どもの発達や成長について実感を持って理解することができます。また、子どもの健やかな成長を支える親の役割や保育の重要性などを学ぶ機会となり、育てられる側から育てる側の役割を担う経験となります。

北海道札幌啓成高等学校

平成22年度から、理数科の2年生が乳児とふれあう体験を行っています。札幌市厚別区の協力により、乳児がいる親子数組に二度来校してもらい、小さな赤ちゃんが数か月間で成長していく様子を実感する機会となっています。

また、お母さんから出産や育児などの話を直接聞くことで、子育ての大変さやよろこびなど親の思いを知り、育児への理解を深めることができる学習となっています。



北海道札幌手稲高等学校

平成19年度から、1年生全員が学校近隣の幼稚園を訪れ、幼児とふれあう保育体験を行っています。小さな子どもと接することで、子どもの成長について関心を高める機会となっています。

また、子どもへの接し方や、将来、親となり子どもを育てることについて、より具体的に学ぶことができる学習となっています。



乳幼児とのふれあいの感想

- 私は小さい子が苦手だったので不安だったけれど、実際にふれあってみると、とてもかわいらしくて神秘的で感動しました。
- 十数年前は私もこんなに小さかったとは驚きでした。
- 赤ちゃんを抱くのは初めてで緊張しましたが、抱っこすると僕の体にすっぽりとはまってきて、僕自身が安心しました。
- 4ヶ月はまだ動きも活発ではないと思っていましたが、動作をまねたり、抱っこしていると動いて予想外に力強かったです。
- 小さい子は癒やしだなと感じて、あったかい気持ちになりました。

理解しよう！考えてみよう！

- 子育てしやすい環境をつくるためには何が必要か、身近な出来事や体験などから考えてみましょう。
- みなさんは、親をはじめ、たくさんの人たちのかかわりによって育てられてきました。家族や周囲の人たちから、自分の幼い頃の様子や子育て支援の状況などについて聞いてみましょう。

第5章

北海道の魅力

みなさんが暮らす北海道には、恵まれた自然や豊かな資源があります。また、広大な北海道では、各地域によって環境が異なるため、それぞれのまちでは、地域の特性を生かしたまちづくりに取り組んでいます。

みなさんは、自分たちが暮らす地域のことをどのくらい知っていますか。知っているようで、知らなかったことが意外とたくさんあるかもしれません。自分の暮らすまちに関心を持ち、地域の魅力を再発見してみましょう。

1 自然豊かな環境と個性ある地域づくり

自然豊かな環境や地域特性を生かしたまちづくりの一つとして、道内の自治体では、子育てしやすい環境づくりに取り組んでいます。子育て世代がしあわせを実感できる政策や、新たな命の誕生を地域全体で喜び応援するプロジェクトなど、先進的な子育て支援策に取り組むことによって、まちのイメージアップや価値を高めています。

“子育てするなら、千歳市”の政策(千歳市)

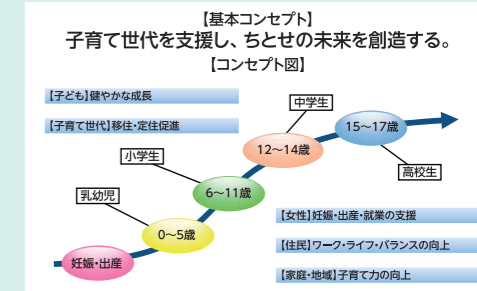
千歳市の人口は、平成22年からの5年間で2,060人増加していますが、さらなるまちの魅力や価値を創造するため、“子育てするなら、千歳市”をキャッチフレーズに、妊娠・出産から子育てまで切れ目のない支援を推進し、子育て世代がしあわせを実感できる「子育てのまち」の実現に取り組んでいます。

市では、子育て世代を支援し、「もう一人子どもを産み育てたい」と思える施策や、これから結婚する若い世代が「この街で子育てをしたい」と実感できる子育て環境を整備し、共働き家庭、片働き(専業主婦)家庭、ひとり親家庭など、さまざまな子育て家庭のニーズに応じた子育て支援を充実させています。

また、事業を実施するだけでは、子育て世代へのアピールは難しいため、「子育てブランディング戦略」を展開しています。

先進的な事業、地域特性や強みを生かした事業を実施するほか、ブランドネームを“子育てするなら、千歳市”とし、他地域との差別化やさまざまな手法を用いて、子育て世代が「子育ての価値」を実感できる政策づくりを進め、積極的なPR活動を展開することで、子育て世代を応援し、元気な子どもたちを増やし、今後とも発展し続ける「プラスイメージ」をつくり、まちの価値を高めています。

●“子育てするなら、千歳市”基本コンセプト



●“子育てするなら、千歳市”のシンボル、ロゴマーク



君の椅子プロジェクト(東川町、剣淵町、愛別町、東神楽町、中川町、長野県売木村)

「君の椅子」とは

「向こう3軒両隣」、かつて暮らしの息づいていた、優しく柔らかな地域の絆をほのぼのと思い起こさせてくれる言葉です。一見、過去の記憶の中に閉じ込められた言葉であるように見えて、しかし、私達がこれから目指すべき地域社会の未来を指し示す、古くて新しい言葉です。高齢社会がスピードを上げて到来し、少子化も予想を超えて一段と進んでいます。

少子高齢社会は、年齢を重ねることに、勇気を持てる社会、そして新しい生命のスタートを地域が支え、その誕生に「ありがとう」を言える社会でありたいと思います。その循環があってこそ、それぞれの人生を懸命に、豊かに生きて、限りある生命の営みを未来にバトンタッチしていけるのです。経済性や利便性だけでなく、地域社会の優しく、柔らかなネットワークを少しでも取り戻していきたい、そのためにひとりひとりがそれぞれに小さな取組みを重ねていく、そんな思いを込めて私達は「君の椅子」プロジェクトを立ち上げ、その一歩を踏み出しました。

北海道という地域の持つ財産とその潜在力を活かして、「新しい生命」、「新しい市民」の誕生を温かく見守り支え合う地域コミュニティ、その再生の火を灯す役割を担いたい、それが私達「君の椅子プロジェクト」の願いです。



出典:「君の椅子」ものがたり 文化出版局(撮影:佐々木育弥)

「君の椅子」の歩み

「君の居場所はどこにあるからね」のメッセージを込めて新生児に産産材で手作りの椅子を贈る「君の椅子」プロジェクト。現在は旭川周辺の5町(東川町、剣淵町、愛別町、東神楽町、中川町)に加え、2015年1月から長野県売木村が参加。「君の椅子」の輪は、道外にも広がりました。2006年からスタートし、10年目となった2015年8月には、東川町で自治体1,000人目の新しい生命が誕生。1,000脚目の椅子が贈られました。

「君の椅子」プロジェクトに参加している町の1つである愛別町では、「君の椅子」プロジェクトの発端となった「ハッピーボーン」でも有名な町です。「ハッピーボーン」は、24年前から始まった町民有志の手で子どもの誕生を花火で祝福する取り組みです。昼時の12時にその花火があがると、町の人たちは、「男の子かな、女の子かな?」と問いを馳せ、またその音が愛別の小学校に届くと、教室の子どもたちは一斉に拍手をして教室内に「おめでとう」の音が湧き上がります。可愛らしい後輩への優しい拍手のプレゼントです。

「君の椅子」プロジェクト 代表 磯田 憲一氏